



いろいろな人がふらりと立ち寄る、
港のような本屋です。

店に入ると、書架で息づく本たちのおしゃべりが聞こえてくるよう。「汽水空港」という名の古書店は、東郷湖の絶景を望むロケーション。童話から専門書まで多様な書籍たちが住み暮らしている。

「毎日10時から、店番をしています」

ふんわり優しい空気をまとった森明菜さんは、物語のひとつから抜け出た登場人物のよう。

米子での美容師時代に知り合ったご主人が、空き家のガレージを自力で改装して始めたこのお店。今では、2人で育てている。表にある「本」の看板を見てふらり立ち寄るお客さんは、居心地の良さに「初めて来た気がしないね」と、棚の本を手にとったりコーヒーを飲んだり。近所なのに知らなかった同士がここで出会ったり。週末には、音楽ライブや読書会なども企画。お客さんののんびり過ごしてもらいたいとカフェを始め、店頭で自作の野菜も販売する。

静かな屋下がりには、店番をしながらミシンを踏む。子供の頃、和裁をやっていた母の横で、見よう見まねの手芸遊びをしていた。湯梨浜に住み始めてその頃のことを思い出し、サコッシュなど作って本の横に並べる。そんな小物のファンも増えてきた。

「こんなことがあったらいいな」を、できることからやっています」「次は読書するための小屋を作りたい。鳥の声しか聞こえない、WiFiもない畑の真ん中で」と話すご主人と、たくさんの方が行き交い、つるつる新しい基地づくりを歩ずつ。

汽水空港
森明菜



ゆ
う
ゆ
う、
ゆ
り
ま